

---

# 空への道行き

土田かこつ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

空への道行き

### 【Zコード】

Z5610Z

### 【作者名】

土田かこつ

### 【あらすじ】

「一週間僕に付き合ってくれたら、痛みのない方法で君を殺してあげる」

古びたビルの屋上、少女の飛び降りを引き止めた謎の男は軽薄そうな顔でそう言った……。

偶然の邂逅が少女の過去に光をあてる。

売れない作家の計画。死にたがりの少女の打算。二人の思惑の行方はいかに。

シリアスよりの青春もの。ラストは救いのあるものになる予定です。

## いつか見た空の色・1

その黒い小さな箱を開けた瞬間、彼が息をのむのがわかつた。

きらびやかな電飾に彩られた並木道。

傍らに並ぶベンチで、隣に座る彼の顔を見上げた。  
橙の柔らかな明かりが横顔を照らし出す。

手渡したばかりの小箱の中には、銀の十字架のネックレスがある  
はずだ。

クリスマスにかこつけた、彼への初めてのプレゼント。

もちろんちゃんと男物で、デザインもそれほど派手じゃないもの  
を選んだつもりだった。

だが。

ふたに右手をそえた彼は箱の中身を見つめたまま動かない。  
怪訝と言つより不安になる。

もともとネックレス自体は自分の選択ではなく彼のリクエストだ  
ったのだが。

好みに合わなかつたのだろうか。

「シルバーのクロス、欲しつて言つてたでしょう？」

見かねて声をかけると、彼は大きくため息をついて顔を上げた。  
吐き出された呼気が白い。

「つけていい？」

こつちが頷くよりも先に、長めの鎌を頭からかぶるよつとして首  
にかけた。

深緑のセーターに銀色がよく映える。

シンプルな形も線の細い彼にあつていた。

「なかなか様になつてるじやん」

ほつとして少し笑う。

彼はネックレスを確かめるように俯いた。

「ん、ありがと」

つと、彼の手が伸ばされた。

髪に「」みでもついてたか、とほんやりと見送つた腕は視界の横を通りすぎ……、気づけば体を引き寄せられた。

「！」

呼吸が近い。息がつまつて言葉が出ない。体が熱を上げていく。自分の心臓の音ばかりがうるさく、彼の鼓動が感じられない。

「……ちよつ、と」

みじりざじょうにも抱きすべめた腕はゆるがない。

油断した。

普段から態度や口ぶり「」そ積極的だが、彼が直接に触れてくることはなかつた。

せいぜい制服の上から捕まれるか髪の毛をかき回すべらいがいいところで、手をつないだこともない。歩くときは必ず人一人分間をあけていた。

もどかしくも心安い距離感を、これまでずっと保つてきたのに。

「あおい」

声が少しだけぐもつて耳に届く。

「なんか、ちよつと泣きそう」

「馬鹿」

甘えをふくんだ声が少しだけ情けなくて笑つた。

ようやく体から力が抜けて、彼の肩にあ「」をのせる。

「うん。馬鹿だな」

ため息とともに吐き出された言葉が冷たく耳をくすぐつて消えていった。

寒かった。

街中がむやみやたらにきらきらしていた。

でもそれが苦にならないくらいには自分も浮かれていた。  
そんな季節。  
今は、昔の。

ぼんやりと白い、つす曇りの空を見上げて少女はため息をついた。

休み明けの月曜日、氣だるい空気がただよつ平日のように下がり。

おそらく、はたからすれば氣まぐれに授業をサボった女子高生が暇をもてあましているように見えただろう。

彼女が腰掛けているのが、古びたビルの屋上の錆びた鉄柵でもなければ。

そこは駅前通りから離れた町のはずれにある、開発から取り残された古いビルだった。

もともと電子部品メーカーの自社ビルだった。会社は倒産したものの建物は放置され、そのまま用途のないオブジェのように町に居座り続けた。

もつとも、最近では肝試しの子供もたひやれつく場所を探すカップルによつて新たな需要を得ていたようである。

少女は柵の外に投げ出した両足を揺らしながら空を見ていた。その顔に思いつめたような表情はない。ただ何かをふつさつとうな目で空をながめていた。

（私が飛び降りたら）

ここは危ない場所として再び封鎖されることになるのだろうか。子供たちから秘密の遊び場を奪つてしまつのはしのびないかな、なんて考えが頭をよぎつて苦笑した。

しかない。

どうしようもない。

どうでもいい。

乾いたあきらめが感情を支配していく。

視線を下に落とす。

見慣れたローファーのはるか先、コンクリートの地面。彼女の最後の目的地。

もう一度顔を上げ、白い空を焼き付けてまぶたを閉じる。そのまま何もない中空に身を躍らせようとかかとで鉄柵を蹴りつけ、

「！」

瞬間、身体に衝撃が走った。

予想していた浮遊感はない。

地面上に打ち付けられた？ まさか。

こんなに意識が残るはずがない。痛みもない。

第一、感じた力が前へではなくうしろへの。

困惑する少女の頭上で誰かがため息をつく気配がした。

「落ちたら痛いぞ？」

頭のすぐ上から聞こえたのは、的確なようひどく的はずれな言葉だった。

飛び降りようとした瞬間に少女を後ろから抱きよせて引き止めた男は、そのまま抱えあげて柵の内側におろしてしまった。

下から見えたからね、間に合ってよかったよ。

どこか真剣味にかける口調であつさりと言わされて唇を噛む。

エレベーターは動かない。下から階段で上つてくるにはそれなりに時間がかかるはずだ。

そんなに長い時間、空に見とれていたのか。

あの古い非常階段を音もなく駆け上がれるはずもないのに足音さ

え気づかなかつた。

そんなに自分の意識に気をとらっていたのか。

「なんでとめたの」

理由なんて聞いても意味はない。通りすがりのお人よしに決まつてゐる。

わかつていても言わずにはいられなかつた。

「んー。可愛い女の子がいなくなるつてのは世の中にとつて結構な損失だらう?」

状況に似合わぬ軽口に、あらためて男を見る。

ダークグレーの長いコート。中のセーター靴も、目深にかぶつたつばの広い帽子もすべて黒に近い灰色だ。肌も浅黒い。夕闇の中にいたら保護色になつて見えなくなつてしまいそうだ。

顔は若く見える。だがどこか時代がずれたような格好だつた。

「おとなしいね、君」

黙つたままの少女に男が笑いかける。

「いつの止められた人つて、正直もつと抵抗するものだと思つてた」

目をそらしてそつけなく言つ。

「別に。死ぬのなんていつでもできる」

止められたことは腹立たしいが、こうなつた以上ことを荒立てずにするませるべきだらう。

警察や家に連絡がいくよつなことになれば一度目がやりにくくなる。

幸い男はあまり生真面目なタイプではなさそつだ。

騒がなければきっとこの場を切り抜けられる。そつ算段をつけた。だが。

「じゃあさ。一週間だけ僕に付き合つてくれないかな」

緊張感のない声が少女の期待を裏切つた。死にそこないにどんなパンパだ。

呆れた少女が突き放すより先に、男が低くさわやかに。

「一週間付き合ってくれたら、痛みのない方法で君を殺してあげる

軽い口調はそのままの物騒な物言い。

だが、少女にはこの上なく魅力的な条件で。

しかめた顔を覗き込む男の表情は軽薄そうなくせにどこか底知れない。

「自殺の手助けは犯罪でしょう」

口についてでた言葉は自分でも言い訳めいていて。

新手の詐欺にでも引っかかつたような気分で相手をにらんだ。

立ち話もなんだから、と連れてこられたのは路地裏の小さな喫茶店だった。黒ずんだレンガ造りの店内は薄暗く、コーヒーと煙草の匂いが漂つ。

男は慣れた様子で店に入り、少女に席をすすめた。注文をとりにきた店員が去るのを見送つて、しごれを切らしたようになにかが口を開く。

「結局、あなたは何なの」

「んー、通りすがりの吸血鬼、かな」

「ともなげに返つてきた言葉はあまりにも突飛で、少女は眉をひそめて男を見る。

「……は？」

「信じない？」

意味がわからない。冗談にしても脈絡がなさすぎる。

少女の目は明らかに不審なものを見るようだ。

露骨な反応に男は肩をすくめたてあつたりと言いかえた。

「月傘既望。しがない物書きさね」

「ツキカサ、キボウ？」

少女は怪訝な声を出した。どこかで聞き覚えのあるような名前だった。しかし、既望と名乗る男の顔は記憶にはない。

「小説家？」

もつとも物書き、つまり作家なら名前だけを知つていてもおかしくはないかもしない。考え直して軽く首を振る。

「君の名前は？」

「佐野葵」

しかたなく名乗った少女、葵はしかめた顔で既望を見た。まだ本来の用件を聞いていない。既望は頷く。

「それでさ。今書いてるのに死にたがりの女の子が出てくるんだだけ

ど、どうも筆が進まなくて。話を聞かせてもらえないかな、と  
間に合つてよかつたよ。

笑つて言つたあの言葉は、「助かつてよかつた」ではなく「取材  
相手が捕まつてよかつた」という意味だつたのか。

助けられたのが不満だつたはずなのに、それはそれで妙に癪に触  
つて葵は眉間のしわを深くした。

「本当に殺してくれるの」

「ちゃんとつきあつてくれたね」

「どうやつて」

いりだちもそのままに言いつのる。

結局、既望の口車にのる形でここまできてしまつたが、望みどおり最後まで面倒をみてくれるかどうかは正直かなりあやしい。  
しかも痛みのない方法で、と既望は言つた。

いつたいどうするつもりなのだらう。何か薬でも使つつもりな  
か。まさか本当に血を吸うわけでもないだらうに。  
できるなら死んだ後であまり事件になるようなことは避けたかつ  
た。

既望は少し驚いた顔をして、ふと息を吐くように笑つた。

「それは秘密」

からかう口調は相変わらず。

人を食つた笑顔もそのまま。

だが、細めた目の中さつきまでとは違つて色を見た気がした。

(この、顔)

見知らぬ男の顔のはず。

なのにその表情は葵がよく知るものに似て。

問いただすことも忘れて葵は息をのんだ。

からかうような笑顔の、その目の中一瞬浮かんだ違つて色。  
何かを抑えるような、いらいえるような、あきらめにも似た何か。  
見慣れぬはず既望の顔に呼びおこされたのは、葵が記憶から追い

出すことのできなかつた少年の面影だつた。

いつも調子のいい口ぶりと人懐っこい笑顔の少年が、不意打ちの  
ようにのぞかせた表情。気づくか気づかないかのほんの一瞬浮かん  
で消える。

既望の顔立ちは彫が深く肌も浅黒い。  
記憶の中の少年は線が細くて色も白い。

顔のつくりはまるで違つ。

なのに、表情のつくりが同じなのだ。

見るものにかすかな痛みを抱かせる田の色。

葵が、その意味を知らうとしてついにかなわなかつた……、

「お待たせしました」

ふいに、第三者の声が葵の思考をさえぎつた。

店員が「コーヒーと紅茶とそれの前に置いていく。

コーヒー カップを引き寄せた既望の顔をうかがえれば、そこにほほさ  
つき見た色はかけらもない。

（見間違ひ、か？）

馬鹿みたいだ。何を今更。

仮に目の前の男が似た表情を見せたからといってそれが何だとい  
うのだ。

既望は手帳を開き、じゃあ改めて、と口を開いた。

「それで、動機はなんだつたんだらう」

「さあね。空が綺麗だつたから、とか」

既望は少し目を見張り、それからおかしそうに笑つた。

「なかなか詩的でいいけど、ちょっと読み手が納得しないかな  
葵の投げやりな調子を気にするふうもない。

さつきを見せた一瞬の田の色以外、既望の表情はほとんど変わらな  
かつた。

からかうような笑み。せいぜい軽く驚いてみせるくらいだ。

どうしたら違う顔をあらわすだらうか  
同情でも引いてみようか。

「彼氏が死んだからとかなりいいの」

「へえ、それは大きいな」

既望が少し身を乗り出した。

葵が引けたのは同情ではなく興味だけだつたらしい。  
落胆というほどでもない落胆。苛立ちの形にならない苛立ち。  
かすかに波立った感情を、大きく息を吐いて落ち着ける。

（まあ、いい）

ただの取材。

結局は他人事。

既望がその態度をつらぬくなら、こちらもただ情報を提供すれば  
いい。

どうせ切り捨てて置いていくだけの記憶だ。  
最低限満足させて殺してもらえばいい。

過剰な同情よりよほどわずらわしくないだろ？

既望が感情をはさまないといふのなら、こちらも感傷は交えない。

「まあ、実際は彼氏でも何でもないけど」

「付き合つてたわけではないのかい？」

「死んだときには」

そう。彼が死んだとき、葵はただの他人だった。  
その少し前までは四六時中隣にいたとしても。

「彼も自殺？」

葵は首を横に振った。

「交通事故。左折してきた車にひかれたの」

小さく苦笑する。

「もつとも、信号無視したのは車じゃなくてそいつのほうだつて言  
うから、実際事故だつたのかもわからないんだけど」

既望は頷いて、手帳にペンを走らせる。

「それはいつの話かな」

「前の春休みの終わり」

「三ヶ月前か」

既望は考え込むように体を引いた。

「ただの後追い、という感じではなさそうだね」

妙にきつぱりとした物言いに葵は眉をひそめて身構えた。

何をいうのだろう、この人は。

「彼が死んで、だけ縁はすでに切れていて、なおかつ事故からもだいぶ時間がたつている」

葵の顔をのぞきこむ。

「どうして今、死のうと思つたんだろう?」

彼が死んだから、だけでは理由にならないと。

後追いなどというステレオタイプの説明では納得できないと。共感も同情も哀れみも用いずに、事実を追つ口調で動機を探つて

くる。

葵自身が気付きもしなかつた感情の裏側。

唐突に、低く鈍く柱時計が鳴つた。

針が三時を差している。

「じゃあ、これは宿題だな」

話を切り上げるように既望は言つた。

このあと用事があるという。拍子抜けした葵の顔をのぞきこむ。

「もつとしゃべりたい?」

「まさか」

解放してくれるなら願つてもない、とあくまで突き放そうとする葵に笑う。

「それは残念。じゃあ、悪いけどあとはよろしく」

既望は薄い財布から千円札を抜き出してテーブルに置くと席を立つた。

去りぎわ、顔だけをむけて付け加える。

「また明日も頼むよ」

これが見た空の色・2（前書き）

回想です。

## 二つが見た空の色・2

そもそものきっかけはなんてことはない。高校に入つてクラスで席が近かつただけだ。

「後藤、空です。よろしく」

振り向いて皿口紹介をした前の席の男の子に葵は皿を瞪つた。綺麗な顔をした子だな、と思った。

地毛だという茶色い髪に、同じく色の薄い目。肌も白い。整つた顔立ちで一見冷たそうだが、笑うと形の違う一重まぶたに愛嬌があつた。

綺麗な子だな、と思った。

華奢に見えるから好みは割れるだろうが、かなりモテるタイプだ  
うひ。

関わると面倒そうだな、と思つた。

ただ出席番号が近かつただけ。接点はない。席が変われば自然に離れていくだろう。

とくに警戒はしなかつた。

ところが。

「セーのさん」

やたらと明るい声に呼ばれてため息をつく。振り向けば調子のいい笑顔で空が歩いてくる。

「これから帰り?」

「委員会」

「ありや残念」

そつけない返事に大げさな落胆の声が返ってきた。そのまま歩き出した葵の横にちやつかりと並ぶ。

昇降口には遠回りだらうとじと田で隣をうかがえれば、まんまと田  
が合つてしまつた。

「このところ万事こんな調子だ。

顔を見れば声をかけてくるし、ひとつと見ればやつてくる。  
同じ図書委員になつた楠本敬司が空の友人だつたといつのがまた  
まずかつた。

放課後、貸し出し当番のときには必ず顔をだしにくる。  
一人にまきこまれる形で話し込み、図書の先生に注意されたこと  
もある。

それはそれで楽しくなかつたわけじゃないけれど。

正直、一緒にいふと疑わしげな女子の視線を感じることが少なく  
なかつた。

ただでさえ人付き合いは得意じゃない。今はまだ不自由もしてい  
ないが、この先避けられるようなことがあれば学校生活に支障をき  
たす。

できればあまり目立ちたくない。

それに。

妙に積極的な様子はあるものの、どこまで本気なのかは疑わしい。  
普段からノリは軽いし照れも緊張もまったく感じられない。  
葵にちょっかいを出しても反応を楽しんでいるだけじゃないのか。  
明るい笑顔でさえもときどき作り物めいてみえてどこか底知れな  
い。

い。

下駄箱へ降りる階段を通りすぎると  
どこまでついてくるつもりだらう。

「あのや」

しびれを切らして口を開いた。

「ふざけてんなならやめてくれる? うつとうじいから

きょとんとした顔でこつちを見る。

丸くなつた田には驚き「そあれ動搖は見られない。  
やつぱり、と思つ。

本氣ではなかつたのだろう。

「付き合つ氣もないくせに」

つぶやくよつと吐き捨てて、背を向けて歩き出す。  
と。

突然何かに腕をとられて足を止めた。  
空が制服の上から手首をつかんでいる。

「何、」

にらみつけようと顔を上げ、息をのんだ。  
初めて見る表情だつた。

淡い色の目が夕陽に透けて妙に赤い。  
いつもの笑みを含まない眼差しはいやに強く、まっすぐ口葵をと  
らえる。

「付き合つて、くれんの？」

いつになく硬い声。

捕まつた、と葵は唇を噛んだ。

通学電車に揺られながら、葵は窓の外に視線を向けた。見慣れた景色が見慣れた通りに流れしていく。

(もひ、この電車にも乗るつもりはなかつたんだけどな)

ツキカサキボウと名乗る男との奇妙な出会いから一夜。朝、目を覚まして真つ先に感じたのは落胆だつた。

生きてこるとこゝ事実。

つまりは昨日、失敗したといふこと。

絶望なんて言葉を使つほど強い感情はなかつた。

(別に、死ぬなんていつでもできる)

既望に言つた言葉に嘘はない。

ただ、すぐに一度目を起こせないならば、それまで目立つ行動はさけなくてはならない。

これ以上引き止められるようなことは御免だ。

だから、仕方がない。

自分に言い聞かせてお、学校に行くのは乗り気がしなかつた。

死に損なつて改めて登校するといつのも馬鹿馬鹿しい。

……それに。

駅からそれで通学路の並木道にさしかかり、葵は息をつめた。校門が近づき生徒が増えるにつれそれは起こる。

葵がすれ違うと、ふと周囲の声がやむのだ。

通りすぎ、しばらくして後ろから密やかなざわめきが耳に届く。

(ねえ、あの子つてや、)

(そうそう、事故で死んだあの、)

(え、あれが?)

(えー、なんか地味ー)

(でもあれって、フランげたんだしょ?)

事故の後、数限りなく繰り返されたやりとり。

あいつが目立つ人間だったせいで、葵まで望まずして有名人だ。しかも、目撃者がいなかつたために車にひかれたという以外詳しいことは何もわからず、様々な憶測が飛び交っていた。

葵もまたそれらの声を否定する術を持たない。

何も知らないからだ。

教室のドアを開けるとまた一瞬、音が消える。

クラスメイトは今更噂をたてる事もないが、それでも微妙な距離をとつていた。

要是ハレモノ扱いだ。背中に少し視線を感じる。

昨日無断で休んだから、それもまた好奇の種になつてゐるのかもしれない。

誰も声はかけない。葵も無言で窓際の席につく。

結局、あのまま既望は去ってしまった。明日も頼むよ、と言ひながら何の約束もない。

もちろん連絡先など教えていない。

(どうするつもりなのだのだろう)

もつとも、このまま会わずにすむのならその方が面倒がない。

そう思いながらも葵は妙に気にかかって、一日外を眺めていた。

それとも既望のほうはあの喫茶店で待ち合わせのつもりでいるのだろうか。

授業が終わって帰りの準備をしていると、廊下からやたらと陽気な声が響いた。

「あーおいつ

無遠慮に高い声と呼ばれた名前に何人かが反応する。

「……杏香」

うめくように葵はつぶやいた。

幼馴染の今井杏香だ。6時限目は体育だつたらしくまだジャージを着ている。

クラスメイトの間をぬうように葵の席までやつてきた。教室に入つてくるならあんな大声で呼ばなくともいいのに。

「何？」

身構えながら聞き返す。

葵は杏香が苦手だった。

人懐っこく、世話好きで顔も広い。おまけに勘も鋭い。

タイプが全く違うのに、何故か昔から葵のことをよくかまつた。あいつが死んで、一年生になつてクラスが分かれていいい加減離れていくかと思つたが、いまだにちよつかいをかけていく。

確かに人見知りな葵はこれまで杏香に助けられたことも少なくない。

だが、だからこそ今の葵にとつては煙たい人物だった。

杏香は悪戯っぽく笑つて葵の耳元に口を寄せる。

「男の人正門で葵のこと待つてたよ」

「男？」

葵は怪訝そうに首をかしげた。

「つばが広くて黒っぽい帽子に長いコートの若い人。そーさな、27、8くらいの」

(まさか)

顔が急に熱を持つ。それを見て杏香は見事に誤解した。

「やるじゃん。あたしけっこー好みかも」

「そういうのじゃない」

「そお? 力オ赤いですよ、葵さん?」

興味津々、と言わんばかりの杏香の目。

葵は鞄をつかんで席を立つた。

「……もういい。じゃあね」

無理やり話を打ち切って、杏香の横を足早にすり抜ける。  
「」のまま話していたらどこのまで詮索されるかわかったものではな

い。

「あ、ちょっと葵、ホームルームはー?」

呼び止めたときにはもう駆け出すよつに教室を出でていた。

「あーあーいいねえ、モテる人は」

男友達はともかく彼氏のいない杏香は半ば本気でため息をついた。

## 怠惰な火曜日・2

まだ生徒の姿のない鉄製の校門前に立つ人影に、葵はため息を吐いた。

のんきに手を振る男をにらみつける。

果たして希望はそこにいた。

「……何でここがわかったの」

昨日は学校には行つてないから後をつけられたわけではないだろう。

制服を着ていたのが失敗だつたか。

紺、ブレザーが多い学区のなかで、薄いグレーの制服はわかりやすかつたのかもしれない。

あきらめ氣味に葵はそう考えたが、既望からはずれた答えが返ってきた。

「昨日、君の靴についてた葉がケヤキだつたからね。ここら辺でケヤキといつたら風見街道の並木道だらう？だからそこが通学路の学校はつてあたりをつけたのさ」

確かに風見街道は通学路だ。だが昨日は家からまつすぐあのビルに向かつた。並木道は通つていない。

（なんでこんな、くだらない嘘）

「あなた、変」

「物書きなんてこんなもんだよ」

慣れたことのようにあつさりと既望は言った。

手に負えない、とばかりにため息をつく。

「どうでもいいけど、こんなところまで来ないでくれる」  
既望は肩をすくめた。

「仕事だからなあ」

「これも取材だつていうの」

「そうだね、高校という場所を見てみたくて。なんか理由でもなき

や来られないだろう。「

まぶしそうに校舎を仰ぎ見る。

「おもしろい場所だな。独特的空氣がある。なんだか楽しそうだ」外からするとそんな風に見えるものなのだろうか。

既望の視線を追うように降り返る。

ホームルームを終えた生徒たちの姿がちらほらと見え始めた。既望が葵の肩を軽く押した。

「行こうか。昨日の店でいいかい？」

歩き出した葵が鞄をゆすって肩にかけた。

ちゃり、と小さな金属音が鳴る。

「それ、君の？」

「その鞄の」

鞄の持ち手につけられた銀色の鎖に田をとめて既望は言った。持ち手につけるには鎖が長すぎるようで、何重にも巻きつけてあつた。もとはネックレスだろうか。銀の十字架が吊り下げられている。

シンプルな形だが、女の子がつけるにはやや大ぶりに見えた。

「傷だらけだね」

そう。何より田を引くのがその傷だった。

おそらく滑らかだつたであろう表面に強く擦つたような無数の傷が走っている。端が黒ずんで汚れもあるようだ。

「……形見」

ぱつり、とつぶやくように葵は言った。

「もとはこっちがあげたものだけだ」

「事故の時もつけてたのか」

既望の指摘に葵は足を止めた。

「知らない」

田を伏せて言つた。

傷ついた銀の十字架。

春休みがあけた始業式の日、前の担任に呼び出されて渡された。空の保護者という人が葵にこれを渡すよう頼んだのだという。（事故にあつたときにつけていたものだそうだよ）

担任が保護者から聞いたなら、おそらくそれは事実なのだろう。それでも葵にとつて事実という実感はない。ただの伝聞でしかなかつた。

葵に別れを告げ、突き放しておきながら何故ずっと手放さなかつたのか。

どうして事故の時にまで身につけていたのか。

保護者が葵に渡すように言つた訳は。

それは、空の意思だったのか。

何も知らない。何も見ていない。何もわからない。

答えが出ない問いを追い続けるのは消耗する。

だからもう終わらせようと決めたのに。

終わらせる過程でまた思い起こされる。

なんて、不毛。

「佐野さんは、彼のこと好きだった？」

葵の鬱屈などお構いなしに既望は質問を続けてくる。遠慮も何も

なありはしない。

それでもむきになつて反発するのは子供じみてる気がして、葵は

つま先に視線を落とした。

「嫌われてたけどね」

遠まわしに認めたことでまたからかわれるかと身構えたが、既望

は予想に反して顔をしかめた。

「嫌われてた？ どうして」

単純な驚きではない口ぶりは少し意外だった。

動機として「彼氏が死んだから」と言った時よりも反応が大きい。  
事故の前には別れていたのだから別に不思議はないだろうに。

作家先生は純愛モノがお好きか。

「さあ。別れてからずっと避けられてたから。メールも電話も無視  
だった」

「……事故は春休みだったね。別れたのはいつ?」

「一月の終わり」

既望は返事のかわりにため息をついた。

どうやら昨日引こうとして失敗した同情を今更のよう引き出し  
てしまつたようだ。

なんとなくおかしくなつて葵は小さく笑つた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5610z/>

---

空への道行き

2011年12月27日20時46分発行